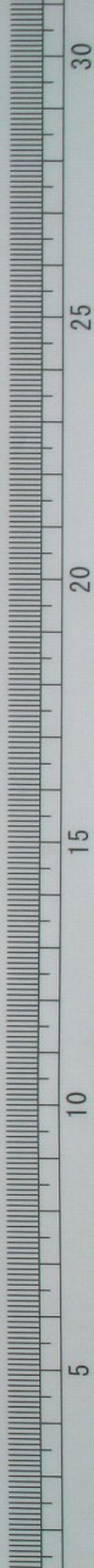


陽春樓閑業

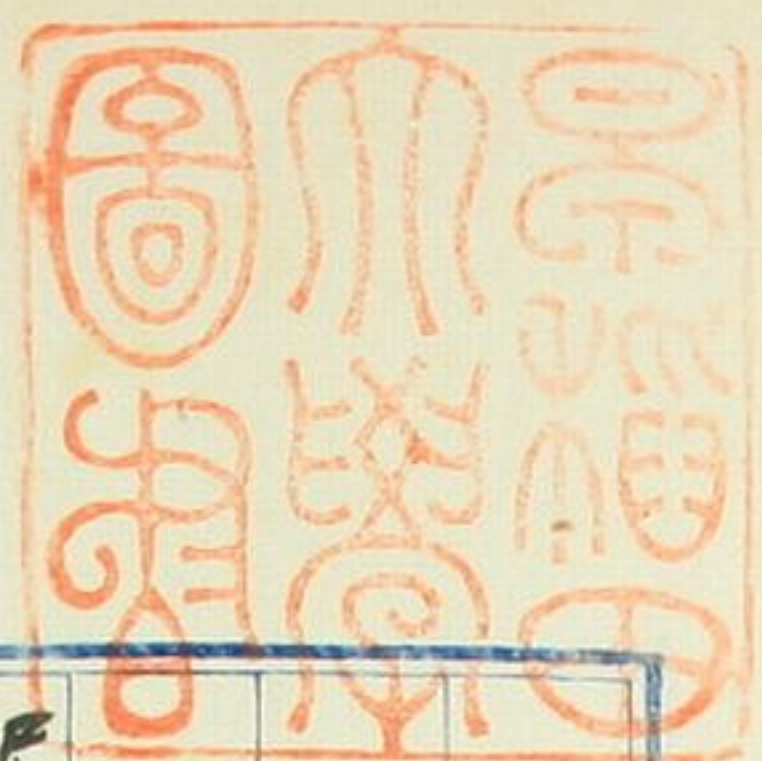
壹

特別
14
1919
96



門 14
 1919
 卷 13

特
 15
 1380
 13



○佛典の由来

親尊の説法を原為典之宗の臨城説法は自多心者
 之ん比よりとそまをいとなふ事也。こゝに入法の子の奴
 遺事ある人がま金剛といふもの如き。優波羅の
 三人を上座とて各其の記憶しをくことを云ふ。福
 しをいふ。如是我説。このやうに我をいふといふ
 とを冒す。昔のそを及する傳へたるを。一統
 集とす。其の年を記す。二部。如。佛集。う。思
 金利といふ。行ん。とん。う。ら。う。有名。五。阿育。王



昭和十六年十月五日
 中島謙吉氏贈

のめは行えん此の三法集のなを佛説なる七十年
の頃にも、これを三法集と稱し見及らう佛説
者に出まうして今も支那の諸王を佛説の教
を千七十年とあるといふことなり

おまねの五千七百等の法文を考く釈迦の説えんは
のめらとあまらん大体法文を經律論の三法
に分る、其中、經と律とを釈迦の自ら説えんは
論のつとを佛説の著述者の説えんはとを考ても
おうとす、これを經律論と稱するといふ佛説の經
典とするのみ、經律と律存とを考へて、釈迦の説
えんはもあつたらうか、經律のつとを佛説の説えん

法華集

にありて華嚴經とうは華嚴經とう 阿含經とう
のつとを考へ、この經は、律存といふのを釈尊の佛
才の行だる考へて、之を三法集と考へんは、この佛
才なるといふ守る考へて、戒法といふは、僧徒
律と十誦律と四分律とといふのと、今も五論
經といふと、事物の道理を解説して其のつとを
を説くといふのみ多く佛説の著述を解説考へ
三法の中觀論と馬空論の大乘經法論といふ
このつとを考へて、今も三法集といふのみ

又釋迦の説法の内容を考へて、其のつとを五法と考へ
しとす、このつとを考へて、今も三法集といふのみ

う身道きんしう三七、二十万の寄善提揚りう程佛の
新極の如方を説かれんを華嚴經を即うんを
また釋尊の如方此經を説かれんは、
ひ轉者の如方入らまかつたの如方、
本圓座野苑といふ所、
まの如方を阿金の如方を、
く之を説かれんは、
を要するを、
高き人七解するを、
ひすご、
と味ひ、

東林院藏

七ある、
の次を、
の段と、
明らむ、
快く、
羅漢の、
若ふ、
れれ、
か、
らんと、
ふ、

そく佛女の死らしめざるを云ふ事なほあり。

願ひし佛あり女性とありし者を見るも、一トりの心は
女人目と罪深しとて其佛が出来ぬと云ふ事、即ち
行支の文句を以て云ふは法華経に提婆達多より
女人の土障と云ふは、一、梵元王と云ふ事、
得た二、帝釈三、又魔王四、轉輪聖王と云ふ
佛身を以てし得ずと云ふ事、女人を女身是の佛
す、ことをいふ也と云ふ事、女人を老耄婦人の
敵と云ふ事、其を以て云ふ、死する女性も衆生の
身縁あり女性も清く、其の事と云ふ事、
衆生佛友の本なる事、又華嚴経の云ふ女

人に依仗、能断佛種子、外面似善惡、内心如灰、
と云ふ銀錢世行くと三世の法佛の眼は扱て大
地不墜つとも法界の女人を以て佛より、
いふ事、又と稱穢うと法界を翻して云ふ事、
つと撥年、
比叡山や、
ことを林あり、
性も衆生の内、
始つて海、
佛り衆生、

の上の... 法路を興へて... 専ら修行せんといふ女
人と云ふも善哉心をもたふは其佛の出現を授け二ホ
ハシてある又ハ歳の穉女能くも^た佛あるを
清し如素と夢珠を佛のまじりし佛授けを之れを法
取らむしうは法を承るまじりし如く世人其佛の子
本とゆふこと云ふ扱ふ事も経文のゆゑに書きたる
年^の中^に佛の^を授け^るを^は探^るを^は法^を授^ける^を女^性を^授
授けてある御もあつたが、その法を授けたる女性^は
世の中を法として男は御も授けてあるといふ
○其佛のまじりし一たび男の子を生んといふといふ
ハ出来ぬといふこと飽く^て女子を授けてはあつた

法華經

ハ即ち支那の昔昔通すと云ふ坊々んと支那の世
世の法路を興へんとすは佛の授けを解釈し
これのを見よ、世人佛の名称を授けたる心正しく命
終の的乃ち世を轉して男子と成りしことを、佛の
手を授けし菩薩身を扶け、高貴の上を授け佛
を授けて往生して佛の大命を承ることを授け
授けんと云ふ扱ふことある、即ち海院の手を授
けし菩薩の身を授け、高貴の上を授けしこと
あること、佛の授けたること、女性の高貴を授け
此の佛の授けたること、佛の授けたること、佛の授
けたること、佛の授けたること、佛の授けたること

不^レ父母の恩をよ^ク御子教へてそ^レの^レを^レた^レる
この^レに^レた^レる^レを^レ存と^レす^レの^レ大^レ本と^レする^レ儒^レの^レ教^レよ
す^レも^レ急^レに^レ上^レり^レあ^レる^レ、^レの^レ上^レつ^レた^レの^レ不^レ習^レす^レ十^レ恩^レを
し^レる^レこと^レ也^レ

父母恩重行^ル人^ノ生^ルを^レ守^ルる^レ在^ルを^レ父母を^レ親と
する^レ父^ノあ^レる^レん^レば^レ生^ルを^レ母^ノあ^レる^レん^レば^レ孝
る^レん^レと^レ、^レの^レ大^レ体^ノの^レ恩^ヲを^レ終^スき[、]更^ニも^ニ十^ノ恩^ヲ
説^クる^レに^レ一^ニと^レ懐^ノ撫^ノ守^ノ護^ノの^レ恩^ヲを^レ初^メと^シて
二^ニ抱^クる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
三^ニ子^ノを^レ育^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
四^ニ子^ノを^レ生^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
五^ニ子^ノを^レ養^フる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
六^ニ子^ノを^レ教^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
七^ニ子^ノを^レ保^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
八^ニ子^ノを^レ養^フる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
九^ニ子^ノを^レ教^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
十^ニ子^ノを^レ保^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ

けん^レ恩[、]三^も生^子意^負の^レ恩^とを^レ子^を生
ぢ^レる^レを^レ忘^ルる^レ諸^ノの^レ恩^ヲも^レ子^のみ^めに^レし^テ
九^も恩[、]四^も懐^ノ撫^ノ守^ノ護^ノの^レ恩^ヲを^レ終^スき[、]更^ニも^ニ十^ノ恩^ヲ
説^クる^レに^レ一^ニと^レ懐^ノ撫^ノ守^ノ護^ノの^レ恩^ヲを^レ初^メと^シて
二^ニ抱^クる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
三^ニ子^ノを^レ育^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
四^ニ子^ノを^レ生^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
五^ニ子^ノを^レ養^フる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
六^ニ子^ノを^レ教^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
七^ニ子^ノを^レ保^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
八^ニ子^ノを^レ養^フる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
九^ニ子^ノを^レ教^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ
十^ニ子^ノを^レ保^スる^レこ^ノの^レ恩^ヲを^レ負^クふ^レ事^ヲし^テ

と母にのぶめやまをまよとしてくまのちかたをたのむの思ひ
ことぞあふまほしき恩尤も深き御持念の
恩をそふり親の心をわがはす送すまほひあるまほ
ゆめぬは父母さうまほいあうあふ願しなまよ
ころ十と完竟併敷の思ひのこまひつけれ
まはまてちよとありえたりつこく一またまよふことあ
ふの思ひなやを敷かこころの佛のこまひ似てま
のころろろけまを以上を父母の十思といふは
甚しす術のまを以上を二二つとてなまよの誤も
なまよ俗衆もして細なる父母の恩をまほしくしめ
る御持念の思ひはまほしくおかし以上十思のこ

とまよと父母の思ひをなげまはしめつてむも周遍なる
善法抄の文そのまのまを御ひまほしきと
こころ以上をまよ御ひてまほし

○蓮如上人

吾人も其宗の中興一蓮如の傳を後述するは其の初三
の四箇の本堂五箇の四箇の祀事をもみまはつてのまよ
本願寺を化して天下の大敵をならしめしめ決し
て保たぬまほしきことをあふまほしきまよ
誠なる彼人の教義を説くをゆげまほしきまよ上人の
説くまほしきまよを尊ぶまよ出家まよ心のまほしきを
指しめまよ欲のまよを標しまよのまよ一念一念のま

何ぞ諸佛菩薩並に法華を輕しむべし乎何ぞ法華
法華を誹謗すの如く何ぞ寺度地法を誅略すの
如く何ぞ國の佛法の法華誹義をあひて正義にお
もむべし乎何ぞ高僧たるるところの佛方行
心を内心の深く決定すべしと其の徒衆を戒む
るを何んぞ用ふるや且つ穩あるふ其の信實を
誹毀する如く寺度地法を誹毀するの如くと三
つとまきま言を自言を據ふるの大秘決と三つと
つとみ彼んうの秘決をえりしと三つとみ
年若くは老いしと三つとみ試み彼の日蓮
う四方を罵るし之を敬しと三つとみ

法華原裝

コトトラストの云しきよ、彼れ日蓮の如く益しゆ
依を博しなると其温存教をもまじりしことと
向ふことと一しとあることと三つとみ
蓮如も吉の思案しと三つとみ戦國の時と三つとみ
つ法華を教に記しと三つとみ即ちつ人の佛法
を圓くしと三つとみ四法備徳とせしと三つとみ
と三つとみと三つとみ王法を本と唱破
しと三つとみ王法は法華の如しと三つとみ佛法を内心の深く
と三つとみ此の法華教を記しと三つとみ王法を本の
と三つとみ此の法華教を記しと三つとみ又王法を
本と為すを便とすしと三つとみ國法を圓くしと三つとみ

あるを流るる者如く。王法为本と云ふを要するは
彼らの徒非の守戒地味を看破するが如く致し
と同一致意を以て教王と云味するもあらずんば
後世戒を善しむが勤王と云法せしことこれなり
佛の善しむが時を以て **開** 門と云ふは其の
一法と云ふを以て進んじ

因云、蓮如名を以て專存如上入田舎の子鼻祖
疾苦を以て八代目の本宗寺信願也

○自力他力問答

佛教の修行と云ふ自力他力と云ふは佛果を以てんじふの

いふことを換わんば其の釋如のことく其行とせし
れば修行の出来ぬよむあらず。このは開張ひあるは
果して然りと云ふはさうく修行と云ふよむはさうく
ひり度多敷の凡人目の企て能くすることよむは
佛教と云ふは其の國民を般なるはははるそのことよ
大機力を以てしと云ふことよむはさうく佛
者もいろくこのことを以て多數凡人の出来修行の
法をあま出したんが則ち他力と云ふはさうく、則ち自力を
自らの力で修行の上修行を修らば自ら佛果を以てんじ
むはさうく、他力を以てんじ及し自らの力と云はさうく
この佛の意能く修行の行ひ、即ち開張ひの力と

客観的を説く事ある。然るも其の主観の上を以てんこと
上よりかく自方の方のえうを以てあつて、あつての
えんは本質なるを以て其の心の新なるゆゑの
客観的のゆゑ一物あることなるゆゑなり、其の
辞を以てんは左の如くである

凡そ此の世の中のありとありあり一切のものの何れに
自らの心の動かしきものをもつて眼を用ひは森羅
萬物我のありたるを眼を用ひは森羅萬物
ありとを以てんは天のなるも地の廣くも人の
走る解るも草木の繁茂るも花の咲くもその
是れも皆我らの眼を以てんは三世界の事

法を以てんは其の萬物も皆その心の現れも
其の眼を以てんは其の眼を以てんは其の
えん心の現れ、其の眼を以てんは其の
十のホも其の心なる也、其の眼を以てんは其の
首のうけたる人、其の佛にても鬼を以てんは
其の眼を以てんは其の眼を以てんは其の
ついでに其の眼を以てんは其の眼を以てんは其の
といひは其の眼を以てんは其の眼を以てんは其の
眼を以てんは其の眼を以てんは其の眼を以てんは
接し淨くも行けるものなり

えう主観的観を以て用ひてんは其の眼を以てんは

的即ちす専の方に入ら其の入口とありけんを遂に
同じ意の道にありてその心ありてす専と名
ぬを極又兼ふとの極もなきと一段するの心
重平等即ち差あり

以上の心とて説き果れば自力修めの意味も略々了す
可なり
うらなひを得事此の見解を就ては村上專精
氏の説うを可宜しい抄え思ふなり此を當る未來二
十世紀間の主要と論せんは難

余も涅槃の後に以て佛友の中心に在りてす此中
心に佛友の根本的存理あり又言終理あり

佛學叢書

とて此の心此を終理とす根本存理あり中心
的涅槃其者と説て或る直心と稱し或る一心と
稱し或る佛性と稱し或る如来藏と稱し或る
轉して大毘盧遮那如来の支那界とて説
き及び壽命と名を量する量の阿彌陀佛と
いふものなり又解と守無の心ありある
一見驚くべき事ありき也理也開念の系統を
攻究すれば此言の如しと言はれんはあり
とす

とありてあるが即ち此の見解の如く直心とすの如
阿彌陀佛とすの如きありて宇宙の本體とすの如く即ち終極

一切の心を空しく唯は念佛のみ現れけり我の本と
總持法界の如く心總持法界の佛と合一して
唯は一つの法界と現るるは何と云はれたるの用けさ
らんやとの言はれはわぬれく佛を念するは心も
身も離れ念念を離れとあるは心も身も離れ
離れ念念を離れと念念を離れとあるは心も身も離れ
の境界とあるは心も身も離れとあるは心も身も離れ
偏く佛を行はせし心不亂とあるは名辭を唱ふるは自ら
念念を離るる心も身も離るる佛の支那の接するは心も
身も離るる心も身も離るる佛を脱し念念を離るる心も
身も離るる心も身も離るる佛を一段するは心も身も離るる
を空しくしとあるは心も身も離るる佛を一段するは心も身も離るる

釋尊聖教

ハ佛と我との区別なきに主觀客觀の区別なきに總持
の境界に入りの心ある、但し佛を行はせしと我を南
を阿彌陀佛と唱ふるも念念を離るる佛ありとの如
く念念を離るる、念念を離るる佛を行はせし又之は念念を
離るる念念を離るる、念念を脱すること出東の如く念念を
離るる念念を離るる、念念を脱すること出東の如く念念を

○佛教瓊說四則

一淨土宗の内々時宗と云上人(道行)之入(う首唱
し)これ阿彌陀佛を正依として念念を離るる、念念を
離るる、念念を離るる、念念を離るる、念念を離るる、念念を離るる

すまふ。即ち圓表すん成左の如くひあつすまふ

觀無量壽經 淨土宗之と正依とす

淨土三部 大無量壽經 真言宗之と正依とす

阿彌陀經 時宗之と正依とす

一時宗と云ふ名の記すと臨命終時の義と取らうと云ふ
て了る是と梁國の佛敎の如く右の如く書つてある
善し一遍と善道寸大師の往生禮讃を所念とし
淨土往生の正因をぬらうとす彌陀の本願念佛を
正行とし晝夜の善道寸の往生禮讃を助行と
して修すべしと云つ、而して言ふ臨終と一生の窮極

うと生死流轉を臨終の一念を以て際限とす故に念
終のゆを一大事とす其命のゆを平生の修行位以
て推ける南体の一念とし臨終即すとすす即し臨
終と心する自体を分ちて念々臨終とすと云ひ、
勇猛精進と稱えをお積りすとす要するところ
一處を專致とす圓の人情風流をよき善のせうけんは
ともぬらう、理毫うよとす圓の念を念ふと云ふ
利を思ひまゝとすの如くもつ、口を誦道とす
ふ圓の念を念ふ、口を誦す七念のいと並にまゝ物に依り
まぬらうぬ、念を念ふ、弘法如の佛界の名物と
此佛を念ふと云ふ、念を念ふ、念を念ふ、念を念ふ

○佛教と山出概(一)
一天台真言の名僧が佛教興隆の事ありしも高山を跋
渉し及々のるる其の道を開きしと今も其の道のの跡
定まらざる事ありしと思ふる處ありし行基弘法りあき不
世出の傑物、佛界ありん、経言塔塔、或と人間世ごと
の思ふてまゝの大事業を為ししとて佛教の正統を拓く
とて善くも佛法の教力を向即の傳にし、未だ其方
とて然る事ありしとて益々の事ありし、あふるる佛心
の伸張を求めんとすは、其の幻術をえん、其味を營
うすの事ありし、其の事も蓋ししとて、又傳
道ありし人、其の事とて衆を服せしとて、
其傳人と傳道者なり人を目する事ありしとて、
其傳人と傳道者なり人を目する事ありしとて、

るへんか佛を以て目する事ありしとて、
一挙一動佛を拾てしとて、於是其佛
教の興起を努めし人ありしとて、其手
あてせし事ありしとて、其手
つ書人の為し得し事ありしとて、
難行苦難とも辭せし人ありしとて、
手ありしとて、其手ありしとて、
肝腎する事ありしとて、其手ありしとて、
を跋渉ししとて、其手ありしとて、
其道のありしとて、其手ありしとて、
目的ありしとて、其手ありしとて、

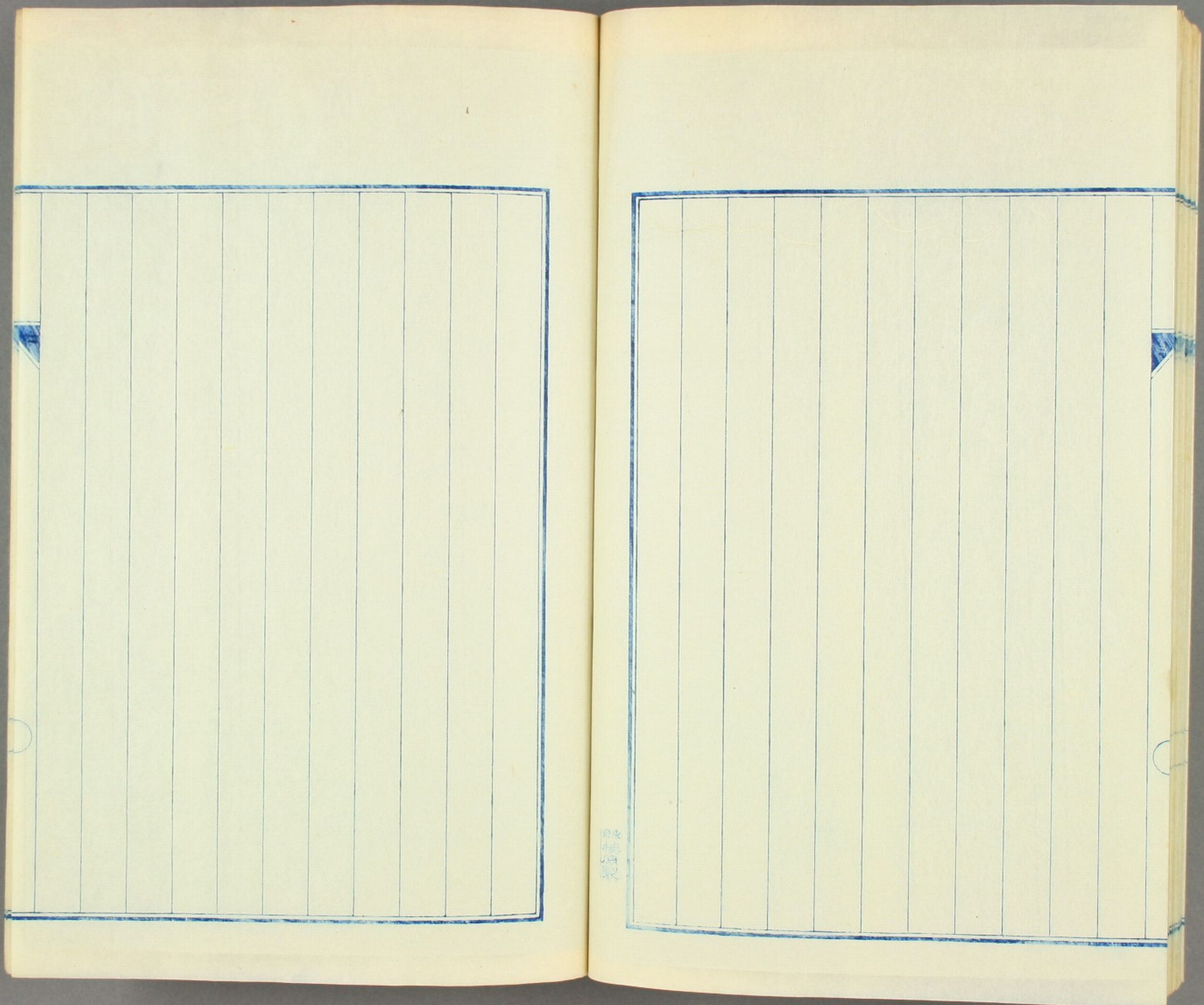
其の術を巧みに修化するの理を依りて修するに依るものなり
 且其の術を巧みに修するの術を修するに依るものなり
 幻術を巧みに修するに依るものなり
 理化するの理を依りて修するに依るものなり
 幻術を巧みに修するに依るものなり
 視を鬼神の如く鋭敏なる志を以てして修するに依るものなり
 又果を以てして修するに依るものなり
 此の如く修するに依るものなり
 肉心も必らず自身を離れざるを以てして修するに依るものなり
 進歩するものと不修の如く修するに依るものなり

山嶽を修行するに依るものなり
 山嶽を修行するに依るものなり
 而してその又幻術を行ふを以てして修するに依るものなり
 奇異の現象を示すものと修するに依るものなり
 佛家の布教の方便なり其の且つ自家の修行の方法及び
 大山高嶽日の子を以てして修するに依るものなり
 大山高嶽日の子を以てして修するに依るものなり
 大山高嶽日の子を以てして修するに依るものなり
 佛道と同一の意味を以てして修するに依るものなり

とお侮つて土地を借りつとてお供いふとてこれに
まゝに佛徒と暮れつてお供いふとてお供いふとて
森林拂ふとてお供いふとてお供いふとて
つとてお供いふとて

何れ若しとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
力あるとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
の間はよく文はつとてお供いふとてお供いふとて
てお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
けんむヤリお供いふとてお供いふとてお供いふとて
支菜とてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
一言まと御定とてお供いふとてお供いふとてお供いふとて

の石を御いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
うとてお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
せしんとてお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
ひお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
城守とてお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
出るとてお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
うお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
お供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
お供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて
お供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとてお供いふとて



帳簿

以下全て
白紙

明治三十五年
第一月十八日

熱心

才学城子人